

東亞經濟研究所

京都帝國大學
經濟學部
內

年四回
(九月、十二月)發行

東亞經濟叢論

第貳卷 第一號

昭和十七年三月

特輯 南方經濟號

南方經濟の基本問題……………	經濟學博士	谷口吉彦
最近佛領印度支那幣制に於ける 二つの改革……………	經濟學博士	松岡孝兒
比島資源價値の進展……………	經濟學士	淺香末起
ビルマの資源と産業と貿易……………	……………	大場忠
インドの農産資源……………	文學士	岡崎三郎
濠洲經濟事情……………	……………	宮崎亮
農業投資植民地としての蘭領インド……………	經濟學士	北野健二
印度支那 ^{に於ける} フランスの經濟政策……………	經濟學士	河野清
日本經濟と南洋貿易……………	經濟學士	松井清
南方纖維原料の生産について……………	經濟學士	岡部利良
南方ゴム資源と其の對策……………	經濟學博士	谷口吉彦
南方資源論……………	經濟學博士	蜷川虎三

附錄 南方文献目錄

書肆 有斐閣 發賣

南方ゴム資源と其の對策

谷 口 吉 彦

目次	一	ゴム資源の特質	二	世界のゴム資源	三	米・英のゴム資源
	四	馬來のゴム資源	五	蘭印のゴム資源	六	ゴム對策の諸問題

一 ゴム資源の特質

戰爭經濟の立場より見れば、南方資源はこれを獲得資源と遮斷資源の二つに區別して考へねばならぬ。

第一の獲得資源は、我方の戰爭遂行に必要な物資を確保するために、吾國に獲得せねばならぬ資源であつて、南方資源について云へば、石油・鐵鑛の如きは是である。

第二の遮斷資源は、敵方の戰爭遂行に必要な物資を遮斷するために、敵性諸國への供給を切斷せねばならぬ資源であつて、南方のゴム・錫の如きは、この適例として擧げることが出来る。

勿論ゴム・錫の如き資源も、我方の戰爭遂行にとつても必要なものであるから、之を獲得せねばならぬことは言ふまでもない。即ち遮斷資源といへども、獲得資源でないわけではない。併しながら吾國の獲得を要する部分は、寧ろその一小部分に過ぎず、大部分はこれまで敵性諸國に供給されてゐたものを遮斷せねばならぬ。また

石油・鐵の如き獲得資源でも、むろん敵國への供給を遮断せねばならぬが、併しこの遮断は米・英に對する何等の脅威も與ふるものではない。たゞ濠洲に對する石油の遮断は、重大な脅威を感じしめるに過ぎない。何れにせよ獲得か遮断かは、たゞ相對的の區別に過ぎないけれども、併しその何れに重點をおくべきかによつて、そこには明白な區別があり、ことに之に對する對策を考究するに當つては、獲得に重點をおくか、遮断に重點をおくかによつて、著しき相違を齎らすこととなる。こゝに問題とするゴム資源の如きは、遮断資源の典型的なものに屬する點に、その第一の特質を認めねばならぬ。

第二の特質として重要な點は、ゴム資源は植物資源であり、栽培資源である所から、循環的には無限の連續性をもつと同時に、また有限的である。一般には樹齡七年にてタツピングを始め十三年にして最高に達し、二十年にして衰頹すると言はれる。併し繰り返し栽培を更生すれば、殆んど無限に無盡藏に連續しうるから、この點においても鐵・石油の如き鑛産資源とは、その資源的特質を異にするものである。

一般に資源としての意義を有しうるためには、たゞ自然的に埋藏または生成されてゐるのではなく、また單に技術的に可能であるといふのではなく、經濟的に資源としての意義を有たねばならぬ。單なる自然的資源または技術的資源では、現實の問題としての資源となり得ない。ゴム資源について見ても、自然的または技術的には、雜草の中にも石炭の中にも、ゴム資源は豊富にあり、また各種の野生ゴムは、南方諸國または南米地方の自然林産物として産出されつゝある。栽培ゴムについても、單なる技術的見地においては、ゴム樹の初年生から二十年生後に至るまで採液は可能である。併し經濟的資源としては、これに幾多の制約の存すること言ふまでもない。

ゴム資源ことにその對策を考ふるに當つては、この特質もまた重要な要素となつて來る。

第三に、南方ゴム資源の世界經濟ならびに南方經濟に對する重要性にも、他の資源とは異なる特質をもつてゐる。後にも詳論する如く、南方ゴムは世界ゴムの九割以上を占め、殆んど獨占的地位を占めてゐる。この點から特に前述の遮斷資源としての重要性をもつわけであるが、同時にまた南方經濟に對しても、後に述ぶるが如く、馬來においては輸出の第一位を占めて輸出總額の約四八%を占め、蘭印においても輸出の第一位にあつて約二六%を占めてゐる。加ふるにその國民經濟または國民生活に對する關係においても、鐵・石油の如き鑛産資源とは異なる重要性をもつてゐる。即ちゴム資源を如何に處置するかは、直ちに是ら諸國の國民に直接の影響をもつてゐる。ゴム對策を考ふるに當つては、この點もまた重要な考慮に上らねばならぬ。

第四に、ゴム資源の特質はまた、その生産と消費とが世界的に背離し偏在してゐる點にある。後に詳細する如く、ゴム資源はその生産の場所においては殆んど全く消費されず、また消費の場所においては殆んど全く生産されない。一般に生産と消費とは、經濟の發展するに従つて、場所的に次第に分離し隔絶するものではあるが、併しゴムの如く殆んど全面的に且つ世界的に生産と消費の背離してゐるものは少い。而してこれが遮斷資源として重要性を有しうる一つの根據である。

第五に、ゴム資源の特質はその生産過程の上にも現はれてゐる。農業生産といふ點は姑らく別とするも、ゴム生産は、英・米の近代的な資本主義的生産による部分と、土着住民の家内的な小農的生産による部分と、全く異なる二つの生産過程が、ほぼ併立的な重要性をもつてゐる。この點においても鐵・石油の如き南方資源と異なる

特質をもつてゐる。ゴム資源ことにその將來の對策を研究する場合に、重要な考慮を拂はねばならぬ特質である。

一般に資源は、經濟的意義を有する場合に、始めて資源となりうるものであるが、併しその經濟的意義なるものは常に一定不變のものではあり得ない。近世の資本主義においては、經濟的資源は營利的資源と同義に解せられ自然的資源も技術的資源も、營利事業の對象となりうる限りにおいて、始めて資源となり得たものである。南方諸國の豊富な資源が、英・米の搾取對象となつて、その私腹を肥すの手段に供せられて來たと言はれるのは是である。南方ゴム資源も亦この例外をなすものではないが、併しゴム生産の他の一半は、英・米資本の營利生産とは異なる生産過程に屬するものである。こゝにゴム資源の第五の特質を認めることが出來ると思ふ。

資源の經濟的意義は、その經濟理念または經濟機構の變革するに従つて、著しく相違を來たすであらう。例へば自由主義の營利經濟において全く資源的意義を有せざりしものも、新たな時代には重要な資源となりうるものもある。人造石油の如きは是である。反對にまた、英・米資本主義の營利對策として重要な資源であつたものも、英米排除の新東亞においては、却つてその資源的意義を喪失または減退するものもあるであらう。東亞共榮圈の新たな理念と機構の下に、英・米の資本主義的支配から解放された大東亞を建設するに當つては、大東亞または南方諸國の資源的意義についても、全く英米追隨主義の考へ方から解放されて、新たな構想の下に根本的に考へ直さねばならぬ。ゴム資源は恰かもその一つの契機をなすものではないかと思ふ。

二 世界のゴム資源

南方資源に限らず、一般に資源は世界經濟との關聯において意義をもつて來る。これは一應は世界經濟から獨立した大東亞經濟の建設を考ふる場合にも同様である。ことに前述の如きゴム資源の特質より見て、南方ゴムはたゞ單獨にそれだけを切離して取扱ふべきではない。この意味において、吾々はまづ世界のゴム資源との關聯において、南方ゴムを見なければならぬ。

第一に、世界のゴム生産量について見るに、今世紀初頭の五萬噸から最近の百萬噸まで、約二十倍の増加を來して、驚異的の躍進をなしたことは言ふまでもない。併しこれは決して平坦な趨勢的增加をなしたものではなく、第一表に示さるゝ如く、幾つかの發展段階を示して今日に至つてゐる。かりに之を次の四期に分つことが出来る。而してこれは當然にもほゞ世界經濟一般の發展段階と照應するものである。

第一表 世界ゴム生産量¹⁾

年次	生産量	指數
1900	53,890 ^{英噸}	100.0
1905	62,145	115.3
1906	66,210	122.9
1907	69,000	128.0
1908	65,400	121.4
1909	69,600	129.2
1910	70,500	130.8
1911	75,149	139.4
1912	98,928	183.6
1913	108,440	201.2
1914	120,380	223.4
1915	158,702	294.5
1916	201,598	374.1
1917	265,698	493.0
1918	296,579	550.4
1919	326,860	606.5
1920	343,731	637.8
1921	296,900	550.9
1922	379,900	705.0
1923	412,800	766.0
1924	421,300	781.8
1925	516,100	957.7
1926	617,788	1146.3
1927	605,196	1123.0
1928	649,674	1205.6
1929	863,410	1602.2
1930	821,915	1525.2
1931	797,441	1479.8
1932	709,840	1317.2
1933	845,291	1568.5
1934	1,013,442	1880.6
1935	863,007	1601.4
1936	852,173	1581.3
1937	1,133,070	2102.6
1938	890,790	1666.4
1939	1,001,931	1857.5
1940	1,388,000	2575.6

1) 南洋栽培協會々報

第一期 一九〇〇年より一九一四年に至る第一次大戦前の十ケ年は、大體において順調の發展を示し、五萬噸から十萬噸に二倍の増進を示してゐる。

第二期 一九一四年より一九二〇年に至る第一次大戦期七ケ年は、十萬噸から三十五萬噸に躍進せる膨脹時代である。併し一般經濟におけると同じく、一九二〇年を頂點として反落するに至つた。

第三期 一九二一年より一九二九年に至る戦後九ケ年の不況時代は、三十萬噸から八十六萬噸まで約三倍の増加を來たしてはゐるが、生産過剰に悩まされて、種々の生産制限を試みた時代である。

第四期 一九三〇年より一九三九年に至る十年間の恐慌および沈滞時代には、八十萬噸より百萬噸まで増加率の最も低い而かも價格の暴落した受難時代である。

第五期 一九四〇年より現在に至る第二次大戦時代は、再び戦時需要の増大による膨脹時代を迎へて、百萬噸から百五十萬噸以上に向つて増進の途上において、大東亞戦争を迎ふることゝなつた。

第二に、世界ゴムの生産に對する消費について見るに、大體は生産増加と共に増大しつゝ來たが、たゞ生産に比すれば、消費は比較的に動搖すくなく、一九三〇年以後の世界恐慌時代を除いては、大體に順調なる増進を示しつゝ來てゐる。

第三に、生産の動搖性と消費の安定性とを調整する在庫量について見るに、大體において生産または消費の躍進時代には減退し、不況または沈滞時代には、在庫量の増加を來たしてゐることは言ふまでもない。ことに一九三〇年以後の恐慌時代における在庫量は激増し、一九三二年の如きは、その年の生産量の八九%、消費量の九三

第二表
世界ゴム消費量および在庫量¹⁾

年次	消費量	在庫量
1921	274,825 ^{英噸}	—
1922	394,527	—
1923	439,407	—
1924	458,252	146,013
1925	551,244	—
1926	533,915	226,327
1927	589,128	260,546
1928	667,027	243,002
1929	785,475	361,310
1930	684,993	487,598
1931	668,660	617,704
1932	670,250	628,518
1933	818,370	622,438
1934	927,000	695,197
1935	937,000	604,311
1936	1,020,100	450,276
1937	1,083,200	528,044
1938	911,300	518,572
1939	1,078,700	394,189

1) 前掲資料

％に相當する在庫量を保有することゝなつた。最近に至つて稍々減退の傾向にはあつたが、大體において半年分程度のストックを保有しつゝあるのが、世界ゴム資源の常態である。最初に述べたる遮斷資源の見地においては、この在庫量ことにその保有國の問題を考へねばならぬが、之については後に論及することとする。

次に、世界ゴムの生産・消費・滞貨に關聯する他の重要な問題は、價格問題である。ゴムは國際商品として最も價格變動の顯著な商品の一つであつた。次の第三表によつて明らかなる如く、大體の一般傾向としては、次第に下落傾向をたどりつゝあるが、併し前述の發展段階に照應して、甚だしき變動を示しつゝ今日に及んでゐる。

今世紀の第一の頂點をなす一九一〇年は、主として自動車工場の勃興によるものであつて、紐育相場の平均は二弗以上の驚くべき高價に上つてゐた。併しこれは大戰中の膨脹時代に拘らず次第に下落して約四分の一の五十

第三表 世界ゴム相場（現物一封度建、平均相場）

年次	新嘉坡	紐育	倫敦
1910	206.600	206.600	105.000
1911	141.300	141.300	65.000
1912	121.600	121.600	57.000
1913	82.000	82.040	126.250
1914	65.300	65.330	27.500
1915	65.700	65.850	30.000
1916	72.500	72.500	34.250
1917	72.500	72.330	33.750
1818	60.100	60.150	27.500
1919	48.700	48.700	25.250
1920	76.170	36.300	22.489
1921	30.810	16.360	10.500
1922	31.260	17.500	9.250
1923	52.250	29.450	15.250
1924	45.380	26.200	13.875
1925	113.290	72.462	35.062
1926	80.310	48.500	23.750
1927	64.320	37.720	18.375
1928	36.820	22.480	10.656
1929	43.860	20.550	10.291
1930	19.280	11.980	5.926
1931	9.806	6.170	3.155
1932	7.000	3.490	2.434
1933	10.230	5.960	3.219
1934	20.686	13.750	6.159
1935	20.141	13.090	6.400
1936	27.014	16.455	7.731
1397	32.042	19.330	9.400
1938	24.052	14.640	7.164

1) 前掲資料

仙程度となり、更に戦後恐慌の暴落をうけて、一九二一年には十六仙臺の最低位に落ちてゐる。然るに其後は戦後景氣の恢復と生産制限の結果として上昇し、一九二五年の頂點では七十二仙に急騰したが、生産増加の影響をうけて下落に轉じ、更に一九三〇年以後は世界恐慌の打撃をうけて急落し、遂に一九三二年には未曾有の暴落を示して僅かに三仙臺となり、最低価格は實に二・〇六仙に落ち、恰かも二十年前の百分の一に下落した。その後は生産制限の影響をうけて次第に安定し、最近では歐洲大戰の刺激をうけて、次第に騰貴傾向を示しつつあつた。

かくの如く世界のゴム價格は波瀾重疊の激動を繰りかへしつゝ來た。ことに第一次大戰後の二十年間は、大體

第四表 世界各國のゴム生産量¹⁾

年次	馬來	蘭印	英領 ボルネオ	サラワク	佛印	印度及 ビルマ	セイロン	其他	以上栽培 ゴム合計	ブラジル	野生	以上野生 ゴム合計	世界總計
1929	453,468	256,386	7,400	11,300	10,100	12,000	80,639	4,504	835,797	22,598	5,015	27,613	863,410
1930	442,940	238,973	7,100	10,300	10,300	10,781	76,315	4,299	801,008	17,137	3,770	20,907	821,915
1931	423,383	255,048	6,200	10,500	11,700	8,097	61,609	5,009	781,546	13,320	2,675	15,895	797,441
1932	405,706	210,124	5,000	7,020	14,420	3,894	49,180	6,156	701,360	6,550	1,930	8,480	709,840
1933	446,012	281,338	7,000	10,000	16,000	4,528	65,536	5,079	835,495	7,790	2,010	9,800	845,251
1934	471,260	373,308	11,001	17,500	18,400	11,300	79,713	17,270	999,852	10,540	3,050	13,590	1,013,442
1935	415,614	275,439	8,885	19,465	29,993	14,279	53,791	25,731	843,607	13,320	6,480	19,800	863,407
1936	352,392	301,893	8,187	21,241	40,722	15,816	49,926	39,191	829,368	13,675	9,130	22,805	852,173
1937	469,030	476,827	13,213	25,998	43,478	17,019	69,687	40,618	1,105,870	15,160	12,040	27,200	1,133,070
1938	370,810	306,826	9,492	17,792	58,495	15,710	50,235	42,645	872,005	14,250	12,610	26,860	898,915
1939	375,000	372,000	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,001,931
1940	539,000	536,000	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,388,000
1929	52.52	29.69	0.83	1.31	1.18	1.39	9.34	0.51	96.80	2.62	0.58	3.20	100.00
1930	53.89	29.08	0.86	1.25	1.25	1.32	9.29	0.52	97.46	2.08	0.46	2.54	100.00
1931	53.09	31.98	0.78	1.32	1.47	1.02	7.72	0.63	98.01	1.67	0.32	1.99	100.00
1932	57.16	29.60	0.70	0.99	2.03	0.55	6.91	0.87	98.81	0.92	0.27	1.19	100.00
1933	52.77	33.28	0.83	1.18	1.90	0.54	7.76	0.60	98.84	0.93	0.23	1.16	100.00
1934	43.50	36.83	1.08	1.59	1.82	1.12	7.87	1.70	98.66	1.04	0.30	1.34	100.00
1935	48.14	31.90	1.03	2.25	3.47	1.65	6.23	2.98	97.71	1.54	0.75	2.29	100.00
1936	41.35	35.43	0.96	2.49	4.98	1.86	5.86	4.59	97.32	1.61	1.07	2.68	100.00
1937	41.39	37.67	1.17	2.29	3.84	1.51	6.15	3.58	97.60	1.34	1.06	2.40	100.00
1938	41.25	34.13	1.06	1.98	6.51	1.73	5.59	4.74	97.01	1.58	1.41	2.99	100.00
1939	37.42	37.13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100.00
1940	38.83	38.62	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100.00

1) 前掲資料

において生産過剰と滞貨増加と價格暴落を繰りかへして來た。これに對して採られた種々の生産制限策も多くは失敗の歴史を繰りかへしたが、一九三四年以後に至り國際ゴム生産協定の成立により、世界的なる生産制限を實施して價格の安定を計りつゝあつた。この國際ゴム・カルテルの目的とする所は、一に歐人ゴム農園の企業的利潤を擁護せんとするものであり、大東亞戰爭および其の後に來るべき東亞共榮經濟においては、之とは全く異なる新たな見地から、種々の對策を必要とするものであるが、併し彼等の採り來れる對策が、如何なる點において失敗し、また如何なる意味において成功せるかを検討することは、今後のゴム對策を研究する上に、重要な參考資料となることは言ふまでもない。之については後に言及する機會がある。

次に世界のゴム資源が各國の間に如何に分布し、また如何に分配されつゝあるかを知るとは、南方ゴム資源の世界における重要性を見る上に極めて重要である。まづ世界の生産分布を第四表によりて最近の概數を示せば總額百四十萬噸のうち、馬來および蘭印は各々四割づゝを占めて八割の百十萬噸に近く、殘餘の二割は佛印・セイロン・英印・ビルマ・英領ボルネオ等の南方諸國に分布してゐる。第四表の其他の栽培ゴムの大部分は泰國に屬し、ブラジルを除く野生ゴムもまた大部分は南方諸國に屬するものであるから、結局するところ世界總額の二%以下を占めるブラジルを除けば、その九八%以上は南方諸國の資源に屬するものである。

然るに世界各國のゴム消費量の分配は、第五表によりて明らかなる如く、生産分布とは全く逆に、主として米・英側によつて獨占されてゐる。即ち世界の消費量約百萬噸のうち、米國は約六割、英國は約一割、これに加へて、奈太・ソ聯・白耳義を加へて、七割五分は聯合國側によつて消費され、獨・伊・佛・日の樞軸側にて二割未滿を

第五表 世界各國のゴム消費量¹⁾

年次	米 國		英 國		加 奈 太		ソ 聯		白 耳 義		以上合計	
	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界
1929	466,475	59.4	72,089	9.2	35,000	4.5	12,700	1.6	9,800	1.3	596,064	75.9
1930	371,119	54.2	75,050	10.9	28,000	4.1	17,500	2.7	10,500	1.5	502,169	73.3
1931	346,683	51.8	76,365	11.4	23,000	3.4	27,000	4.0	10,000	1.5	483,048	72.1
1932	314,618	46.9	78,561	11.7	19,000	2.8	30,000	4.4	8,000	1.1	450,179	67.2
1933	416,062	50.8	79,424	9.7	18,000	2.2	30,800	3.8	9,500	1.2	553,786	67.7
1934	455,935	49.2	108,900	11.7	29,500	3.2	47,000	5.1	10,000	1.1	651,335	70.2
1935	496,650	53.0	95,457	10.2	26,000	2.8	35,000	4.1	8,000	0.9	661,107	70.6
1936	574,820	56.3	80,840	7.9	29,000	2.8	34,000	3.3	8,000	0.8	726,660	71.2
1937	543,114	50.1	112,068	10.3	34,000	3.1	28,000	2.6	15,000	1.4	732,182	67.6
1938	411,300	45.1	103,094	11.3	25,000	2.7	23,000	2.5	10,000	1.1	572,394	62.8
1939	577,400	53.5	125,400	11.6	32,000	3.0	25,000	2.3	10,000	0.9	769,800	71.4
1940 (推定)	575,000	58.3	100,000	10.1	35,000	3.5	20,000	2.1	11,000	1.1	741,000	75.1
年次	獨 逸		伊 太 利		佛 蘭 西		日 本		以上合計		其他世界總計	
	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界	消費量	對世界
1929	50,000	7.0	16,000	2.0	62,000	7.9	34,000	4.3	162,000	20.6	785,475	100.0
1930	47,000	6.9	18,000	2.6	60,000	8.8	33,000	4.9	158,000	23.2	684,993	100.0
1931	36,000	5.4	10,000	1.5	60,000	8.9	38,000	5.6	144,000	21.5	658,660	100.0
1932	41,000	6.1	13,000	1.9	60,000	8.9	53,000	7.9	167,000	24.9	670,250	100.0
1933	50,000	6.1	17,000	2.1	62,000	7.6	62,000	7.6	191,000	23.3	818,370	100.0
1934	58,000	6.3	23,000	2.5	52,000	5.6	74,000	8.0	207,000	22.3	927,000	100.0
1935	63,000	6.7	20,000	2.1	57,000	6.1	52,000	5.5	192,000	20.5	937,000	100.0
1936	66,000	6.5	18,000	1.8	58,000	5.7	61,000	6.0	203,000	19.9	1,020,100	100.0
1937	96,000	8.9	23,000	2.1	61,000	5.5	60,000	5.4	240,000	22.2	1,083,200	100.0
1938	87,000	9.6	25,000	2.7	59,000	6.4	46,000	5.0	217,000	23.9	911,300	100.0
1939	72,000	6.7	22,000	2.0	62,000	5.7	44,000	4.1	200,000	18.5	1,078,700	100.0
1940 (推定)	3,000	0.3	27,000	2.7	58,000	5.9	48,000	4.9	136,000	13.8	987,000	100.0

1) 前掲資料

消費するに過ぎない。

かくの如く生産地においては殆んど全く消費せられず、消費地においては殆んど全く生産せられず、生産と消費の世界的に背離して偏在する點が、ゴム資源の一つの特質をなすものであつて、こゝにゴム資源の特殊な重要性、ことに戦時經濟における遮斷資源としての重要性が存するわけである。

三 米・英のゴム資源

敵性國家のゴム資源を遮斷せんとする所に、ゴム對策の重點をおかんとすれば、この對策の効果を判斷する資料として、米・英兩國のゴム資源につき検討を加へておかねばならぬ。

米・英兩國は何れもその國內には全く生ゴムの原料資源を有しない。たゞ米國は南米諸國より少量の供給をうけ、英國は屬領のセイロン・印度・ビルマより多少の輸入をなしうるに過ぎない。従つてその大部分は馬來・蘭印その他の南方諸國に輸入を仰いでゐたことは周知の事實である。

いま米・英それ々の純輸入量・消費量および在庫量を對照せしめたる第六表について見るに、まづ米國の純輸入量は年々約五十萬噸を示し、世界各國の總輸入量の五割強を占めてゐる。之に對して英國の輸入量は約十萬噸、世界輸入の一割程度にすぎない。併しこれは再輸出を控除せる純輸入量であつて、米國においては生ゴムの再輸出は殆んどなく、輸入量は大體そのまま國內消費に向けられつゝあるが、英國は全く事情を異にし、多量の生ゴムを屬領その他の南方諸國より輸入し、之をそのまま歐洲各國に再輸出しつゝあるから、國內消費量は總輸

第六表 米・英のゴム資源¹⁾

年次	米 國						英 國					
	純輸入量		消費量		在庫量		純輸入量		消費量		在庫量	
	噸數	世界總輸入に對する%	噸數	世界總消費に對する%	噸數	世界總在庫に對する%	噸數	世界總輸入に對する%	噸數	世界總消費に對する%	噸數	世界總在庫に對する%
1929	528,608	57.7	466,475	59.4	118,528	32.3	122,675	13.7	72,089	9.2	73,276	20.3
1930	458,036	53.3	371,119	54.2	202,558	41.6	120,069	14.0	75,050	10.9	118,297	24.3
1931	447,100	54.6	346,683	51.8	313,163	50.8	85,200	10.4	76,365	11.4	127,103	20.6
1932	393,800	55.1	314,618	46.9	388,818	61.9	44,100	6.2	78,561	11.7	92,567	14.7
1933	398,500	49.9	416,062	50.8	353,847	56.9	73,300	9.2	79,424	9.7	86,438	13.9
1934	438,941	46.2	455,935	49.2	356,525	51.3	158,481	16.7	108,900	11.7	134,790	19.4
1935	466,583	50.0	496,650	53.0	295,468	48.9	174,256	18.7	95,457	10.2	164,140	27.2
1936	475,500	57.2	574,820	56.3	218,744	48.6	6,800	—	80,840	7.9	78,318	17.4
1937	592,528	53.1	543,114	50.1	256,535	48.6	92,431	8.3	112,068	10.3	57,611	10.9
1938	—	—	411,000	45.1	245,413	47.4	—	—	103,094	11.3	86,680	16.7
1939	—	—	577,400	53.5	138,017	34.9	—	—	125,400	11.6	30,515	7.7
1940	—	—	575,000	58.0	—	—	—	—	100,000	10.1	—	—

1) 前掲資料

入量よりも遙かに少く、従つて純輸入量は總輸入量よりも少い。

いま英國における最近三ヶ年の生ゴム再輸出量を第七表について見るに、例外的には、輸入よりも却つて輸出の多い年もあるが、普通は輸入の約三割を再輸出し、その中の約六割をソ聯へ、一割程度をドイツへ、また白耳義・米國等へも相當に輸出しつつあつた。

然らば米・英の輸入ゴムは、世界の如何なる地域より來るか、まづ米國について總てのゴム類の輸入量および

第七表 英國における生ゴムの再輸出¹⁾

年次	再輸出先	
	数量	歩合
一九三八年	数量 三六、五二 歩合 三三・〇	数量 三六、五二 歩合 三三・〇
一九三七年	数量 六〇、一七五 歩合 四一・〇	数量 六〇、一七五 歩合 四一・〇
一九三六年	数量 九八、五九 歩合 六六・六	数量 九八、五九 歩合 六六・六
	ソ 聯	獨 逸
	白耳義	米 國
	英領各地	伊 大 利
	佛 蘭 西	其 他
	以上再輸出合計	總輸入量
	對する再輸出の歩合	總輸入量に對する再輸出の歩合

第八表 米國輸入ゴムの種類別²⁾

年次	種類	
	数量	歩合
一九三八年	数量 三九七、六〇〇 歩合 三三・〇	数量 三九七、六〇〇 歩合 三三・〇
一九三七年	数量 五七四、六〇〇 歩合 三三・〇	数量 五七四、六〇〇 歩合 三三・〇
一九三六年	数量 四六七、〇六四 歩合 三三・〇	数量 四六七、〇六四 歩合 三三・〇
一九三五年	数量 四三三、二三四 歩合 三三・〇	数量 四三三、二三四 歩合 三三・〇
	生ゴム	ラテックス
	ゴアニール	ガタバラタ
	ガタシアク	ホンチナア
	再生ゴム	屑ゴム
	合計	合計

南方ゴム資源と其の對策

第二卷 三〇九 第一號 三〇九

1 日本護謨製品輸出組合『調査研究』第二十輯「各國護謨工業と貿易狀況」P.76に據る。
 2) Foreign Commerce and Navigation of the United States, 1935, 1936, 1937, 1938, により 2240 pounds=1 long ton として作成す。

種類別を見るに、年々四十萬乃至六十萬噸の輸入のうち、その大部分は南方諸國より來る生ゴムおよびラテックスであつて、少量のガタゴム類および屑ゴムは、アフリカ・南米・歐洲より來るものである。

米國のゴム輸入先を見るに、第九表に示さるゝ如く、その六割乃至七割は馬來半島より來り、二割以上は蘭印より來り、之に次ぐセイロン・佛領印度・英領印度・比律島等を加ふれば、南方諸國よりの輸入は實に九七%を占めてゐる。是等の地方より來るゴム類は、生ゴム・ラテックス・ガタベルチャ・ボンチアナを主とするものである。

ブラジル以下の米大陸諸國より來るものは、全體として五千噸内外に過ぎず、僅かに一%を占むるに過ぎない。このうち生ゴムはブラジル・ペルー・エクアドル・ボリビヤより來り、ペルー・コロンビヤよりはガタベルチャを、メキシコよりはグアユールゴムを、カナダよりは屑ゴムを輸入しつゝある。

第九表 米國のゴム輸入先¹⁾

輸入先	年次	
	一九三五年	一九三六年
馬來半島	三,七三〇	三,四一七
	英領印度	九,三六六
佛領印度	七,六九二	三,三二二
英領印度	八,三三三	三,三三三
比領印度	三,三三三	三,三三三
セイロン	三,三三三	三,三三三
其他	三,三三三	三,三三三
合計	四九,〇〇四	四九,〇〇四
比率	七・三	七・三
一九三七年	一九三八年	
馬來半島	三,七三〇	三,七三〇
英領印度	九,三六六	九,三六六
佛領印度	七,六九二	七,六九二
英領印度	八,三三三	八,三三三
比領印度	三,三三三	三,三三三
セイロン	三,三三三	三,三三三
其他	三,三三三	三,三三三
合計	四九,〇〇四	四九,〇〇四
比率	七・三	七・三

1) Foreign Commerce and Navigation of the United States, 1935, 1936, 1937, 1938 に據り、2240 pounds=1 longton として作成す。

其他共 計	和 計	佛 蘭	英 國	白 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計
其他共 計	和 計	佛 蘭	英 國	白 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計	佛 領 計
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

南方ゴム資源を失つた米國としては、必然に南米ゴムに依存せねばならぬこととなるが、元來ブラジルのアマゾン流域は、今日の栽培ゴムの原産地であり、一九〇五年までは世界ゴムを獨占しつゝあつた地方で、其後は南洋ゴムに壓迫されて滅亡に頻し、最近では南米全體として約一萬五千噸程度を輸出しうるに過ぎない。大戦勃發以來アメリカはブラジルに對して年産六萬噸の供給を要求しつゝあると傳へてゐるが、急速に之を増産することは恐らく困難であらう。かりに此の程度に増産されたとしても、これはアメリカ平時の需要量の約一割を占めるに過ぎない。

南方ゴム資源と其の對策

2) 朝日新聞, 昭和十七年一月十九日。

然らばアフリカ諸國のゴム資源はどうか、さきの第九表に示さるゝ如く、リベリヤ・ニゼリヤその他よりも多少は輸入されつゝあつたが、全體として最大三千噸程度に過ぎない。また英國その他の歐洲諸國より輸入されてゐるのは、主として層ゴムであつて、歐洲自身がゴム不足を來たす場合には、之は全く期待することは出來ないであらう。南方ゴムの遮断によつて、米國のゴム資源は全く枯渇するわけではないが、併し如何に努力しても、精々のところ平時の五%乃至一〇%を補給しうるに止まるであらう。

然らば英國のゴム資源はどうか、先にも述ぶる如く、英國は平時の概數十五萬噸を輸入し、五萬噸を再輸出して、十萬噸を消費しつゝあるが、その輸入先は第十表によりて明らかなる如く、馬來より約七割、蘭印より約一割五分を輸入し、セイロン・英印その他の英領より約一割五分を輸入して、全體の九八%までは南方諸國より供

第十表 英國における輸入先¹⁾

年次	輸入先		馬來	蘭印	セイロン	英印	其他英領	以上合計	ブラジル	其他共 輸入總計	ガダパチャ 及パラタヤ 層及再生ゴ ム輸入量	再生ゴ ム輸入量
	數量	割合										
一九三六年	三八〇、三三二	七五・五	三六、六六三	二四、八三二	八、四八二	七、六六五	五、五	八九、八二	二九、二六四	一、三三三、七六七	一九、九二六	四、〇九二
一九三七年	二、〇四六、五五五	六七・二	四九五、五三三	三三、九〇〇	二五、七三三	九、七五七	二、九三三、四四三	六、三三	二六、一八三	三、四四五、〇七四	二九、〇二五	二、八、九四二
一九三八年	二、六六、九七六	六九・七	五九、七三三	二七、四三三	一六、七九	二、八、五三三	三、七八、四四四	六、四	一六、二七	三、七九、五三三	二六、〇〇三	七、三三二

1) 日本護謨製品輸出組合、前掲冊子 P.74 に據る。

給をうけつゝあるから、その遮断は殆んど致命的の打撃を意味するわけである。

要するに印度・セイロンをも含めた南方ゴムを遮断しうるならば、米國にとつては九七%まで、英國にとつては九八%まで、原料ゴムの供給を断つこととなる。たゞ兩國とも開戦前すでに相當のストックを保有し、且つ國內層ゴムの再生も可能であるから、兩國がゴム飢饉のために直ちに屈服するであらうと速断することは出来ないが、併し戦争が長期となればなるほど、次第にその不足を來たさねばならぬことは明らかである。

四 馬來半島のゴム資源

馬來ゴムは蘭印と共に、世界ゴム資源の大部分を占めるのみならず、馬來半島にとつても殆んどその經濟全體を動かす程に重要なる資源である。馬來半島に栽培ゴムの初めて移植されたのは、一八七七年と言はれるが、一九〇〇年の頃は尙ほその原産地たる南米の野生ゴムが世界市場を獨占してゐた。一九〇五年には尙ほ馬來ゴム二百噸に對して、南米ゴムは三萬五千噸に達してゐた。然るに一九一〇年以後の自動車工業の勃興につれて、第十表によりて明らかなる如く、馬來ゴムはその絶對數量においても、世界ゴムに對する相對的地位においても、俄然として優勢となり、第一次大戰の勃發した一九一四年には、すでに世界ゴムの四割を占めて、年産五萬噸に近づいてゐた。次いで第一次大戰の影響をうけて躍進し、戦争直後には世界の六割を超え、年産二十萬噸に達してゐた。

一九二〇年以後は屢々生産過剩と價格暴落に脅やかされながらも次第に發展して、一九二五年には二十萬噸を

年次	生産量 千噸	世界總生産に 對する割合 %
1910	6,500	9.23
1911	10,800	14.38
1912	20,300	20.53
1913	33,600	31.00
1914	47,000	39.17
1915	70,200	44.23
1916	96,000	47.76
1917	129,000	48.69
1918	112,000	37.84
1919	204,000	62.58
1920	174,000	50.73
1921	150,000	50.52
1922	192,000	50.53
1923	198,000	48.06
1924	167,800	39.86
1925	212,900	41.26
1926	285,700	46.30
1927	242,200	40.03
1928	297,508	45.84
1929	453,468	53.24
1930	442,940	53.89
1931	423,383	53.12
1932	405,706	57.16
1933	446,012	52.78
1934	471,360	46.53
1935	415,614	48.16
1936	352,392	41.36
1937	469,030	41.40
1938	370,810	41.63
1939	375,000	37.46
1940	539,000	38.83

1) 南洋栽培協會報に據る。

恢復し、一九二九年の世界恐慌前には、四十五萬噸、世界の五割以上を占めてゐたが、恐慌の影響は最も甚だしき打撃を與へ、一九三四年以後は、國際ゴム限産協定の下に著しく生産を制限されて、年産四十萬噸以下になり、相對的にも世界の四割以下に落つることとなつた。然るに今次世界戦争の影響をうけて一九四〇年には五十四萬噸に近く、未曾有の最高記録を示したが、併し同時に蘭印その他の増産も著しきたため、相對的には世界の四割以下に過ぎない。即ち馬來ゴムの大體の概數は、年産五十萬噸、世界の四割を占めると言へる。最近の傾向としては、絶對的には増産されたが、相對的には蘭印・佛印その他の南方諸國の進出のために、世界の五割から四割に減退しつゝあることが看取される。

然らばゴムは馬來半島の如何なる地方に栽培されつゝあるか、ゴム園は全半島の殆んど到るところに開發され

第十二表 馬來ゴム生産の地方的分布¹⁾

年	植付面積			生産數量		
	馬來聯邦	馬來非聯邦	海峽植民地	馬來聯邦	馬來非聯邦	海峽植民地
一九三五年	面積 一,七九七,七〇〇 ^{英畝} 割合 %	面積 一,一八一,八〇〇	面積 三三三,二四〇	面積 二〇〇,四七五 ^{英畝} 割合 %	面積 一四三,二七三	面積 三五,八〇七
一九三六年	面積 一,五七六,四〇〇 割合 %	面積 一,三三九,四〇〇	面積 三〇〇,七九〇	面積 一八七,〇二五	面積 一四一,四七五	面積 三三,九一九
一九三八年	面積 一,六三三,〇九〇 割合 %	面積 一,三四七,九四〇	面積 三三三,二四〇	面積 一八四,〇六五	面積 一四七,七四〇	面積 三九,〇九九
			面積 三,一九四,八五六			面積 三七八,一五二
			面積 三,三三六,六四〇			面積 三五五,〇〇五
			面積 三,二九六,六四七			面積 三〇〇,八九六

てゐるが、まづ植付面積について見るに第十二表によつて明らかなる如く、全體の概數三百萬エイカーのうち、その五割は馬來聯邦の四州（ペラ、スランゴール、バハン、ネグリサムピラン）に、その四割は馬來非聯邦の六州（シヨホール、パリス、ケダー、ケランタン、トレンガヌ、ブルネイ）に、その一割は海峽植民地（シンガポール、マラッカ、ペナン、ウエルスレー）に分布されてゐる。またゴムの生産量について見るに、聯邦諸州に五割以上、非聯邦諸州に四割以下、海峽植民地に一割以下を生産しつゝある。即ち栽培面積と生産數量とは必ずしも正確に比例せず、段當り收量は、聯邦諸州において最大に、海峽植民地において最少となつてゐる。

馬來半島のゴム栽培は Estate と稱せられる百エイカー以上の大規模農園と、Small Holding と稱せられる百エイカー未満の小農園より成つてゐるが、この兩者が如何なる比例において構成されてゐるかは、馬來半島における大農と小農、歐人ゴムと住民ゴムとの問題に關聯して重要な問題である。いま第十三表について栽培面積に

南方ゴム資源と其の對策

第二卷 三一五 第一號 三一五

1) Malayan Year book に據り算出す。

つきこの點を見る時は、大體において六割は大農に、四割は小農に屬してゐる。而して最近數年間の傾向においては、さほど顯著ではないが、稍々大農面積の増加と小農面積の減退傾向が現はれてゐる。

第十三表 馬來ゴム園の規模別面積

規 模	年 次	
	植付面積 百分比	植付面積 百分比
大 農 園 (百英反以上)	一九三一年 一八五,七五〇	一九三二年 一八七,七〇九
小 農 園 (百英反未満)	一〇三,三〇三	一〇三,三〇三
合 計	二八九,〇五三	二九一,〇一三
	一九三三年 一八七,三三九	一九三四年 二〇〇,一七三
	一〇三,三〇三	一〇三,三〇三
	二九〇,六四二	三〇三,四七六
	一九三五年 二〇三,九六九	一九三六年 二〇二,七〇三
	一〇三,三〇三	一〇三,三〇三
	三〇七,二七二	三〇六,〇〇六
	一九三七年 二〇三,三〇八	一九三八年 二〇三,九六九
	一〇三,三〇三	一〇三,三〇三
	三〇六,六一一	三〇七,二七二

次に大農と小農との比例を、ゴム生産量について見るに、第十四表に示さるゝ如く、以前には大農より五割五分、小農より四割五分を出しつゝあつたが、最近では大農より七割近く、小農より三割以上を生産して、著しき變化を示してゐる。而して栽培面積については前述の如く此の期間に著しき變化はないのであるから、これは恐らく生産制限の影響ではないかと思はれる。即ち國際ゴム・カルテルの成立する一九三四年までは、大農園の收量の比率は面積の比率よりも遙かに低く、小農園は遙かに高かつたが、一九三五年以來はこの關係は全く逆に現はれて、大農園は面積の割合に收量多く、小農園は面積に比し收量は少くなつてゐる。これは自然的な段當り收

1) Malayan Year book により算出す。

量の相違といふよりは、寧ろ人為的な生産制限が小農園に對してより強く行はれてゐるからではないか。

第十四表 馬來ゴム園の規模別生産量¹⁾

規模	年次	
	一九三一年	一九三二年
大農園 (百英反以上)	生産量 二二九,四四五 英噸	二四〇,〇七
小農園 (百英反未満)	生産量 一五,四三三	一七,〇〇〇
合計	生産量 二四四,八七八	二五七,〇七
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 四四、八七五	四七、三三七
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 四九、八三五	四九、三三九
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 三七、六六一	三五、四九一
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 三三、〇〇五	三三、〇〇五
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 四三、四九四	四三、四九四
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇
	生産量 三六、八八九	三六、八八九
	生産百分比 一〇〇・〇	一〇〇・〇

大農と小農とによりて、段當り收量が如何に相違するかは、次の第十五表によつて更に明らかである。馬來半島の標準的收量は、一エーカー當り年産五〇〇封度、最高七〇〇封度、最低二〇〇封度、平均四〇〇—四五〇封度

第十五表 馬來ゴム園一英反當り收量²⁾

規模	年次	
	一九三一年	一九三二年
大農園 (百英反以上)	封度 二八九・三	二八九・六
小農園 (百英反未満)	三三八・九	三八一・〇
平均	三二六・九	三二八・三
	一九三三年	一九三四年
大農園	二八八・三	二九二・四
小農園	三三八・七	三八二・四
平均	三二八・六	三二七・二
	一九三五年	一九三六年
大農園	二六九・一	二五八・四
小農園	二六二・四	二四三・一
平均	二六五・四	二五二・七
	一九三七年	一九三八年
大農園	三四七・九	二七一・四
小農園	三三一・六	二〇三・二
平均	三四二・二	二四五・三

1) Malayan Year book により算出す。
2) 第十三表及第十四表に據り 1英噸=2,240封度として算出す。

と言はれてゐるが、¹⁾第十五表によれば事實上の収量は三〇〇封度以下である。而して最近では生産制限の結果として、著しく低減しつゝあることも明らかである。大農と小農との關係については、一九三四年までは小農において遙かに収量多く、一九三五年以後は逆に大農において遙かに多収量である。國際ゴム限産協定が大農と小農により如何に異なる影響を及ぼしたかは、こゝに最も明瞭に現はれてゐる様である。

然らば百エイカー以上の大農園は、いかなる規模において經營されつゝあるか、今これを四階級に分ちて見る時は、第十六表によりて明らかなる如く、最近では百エイカー以上五百エイカー未満に屬するもの一割五分、五

第十六表 馬來大農園の經營規模²⁾

規 模	年 次	植付面積 百分 比					
		一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三八年	
一〇〇 <small>英反</small> — 四九九 <small>英反</small>		一六、六三三 <small>英反</small> 一四、七	三九、三七九 一六、六	三九、三三〇 一六、五	三七、三三〇 一六、二	三七、八八六 一五、六	
五〇〇— 九九九		二〇、四六三 一六、八	二〇、四 一六、四	二〇、四 一六、四	二七、二九 一三、七	二六、二七 一三、六	
一〇、〇〇〇— 四、九九九		六九、九 二、二	三三、三 一、一	三三、三 一、一	三六、八 一、一	三九、九 一、一	
五、〇〇〇— 以上		一、三〇〇 二、三	三、〇 九、七	三、〇 九、七	二、八 五、六	三、九 九、二	
合 計		一〇〇 一〇〇	一〇〇 一〇〇	一〇〇 一〇〇	一〇〇 一〇〇	一〇〇 一〇〇	

1) 南洋年鑑(昭和十二年版), P. 897.
2) Malayan Year book により算出す。

百エイカー以上千エイカー未満は一割三分、千エイカー以上五千エイカー未満は五割、五千エイカー以上の大農は二割近くを占めてゐる。即ち全體の七割以上は、千エイカー以上の大農園であつて、如何に大規模經營の行はれつゝあるかを知ることが出来る。而して最近の傾向として著しく現はれてゐるのは、五千エイカー以上の最大農の著増傾向と、五百エイカー乃至千エイカーの階級および千エイカー乃至五千エイカーの階級、すなはち中間階級の減退傾向である。さきに小農と大農との關係においても、大農面積の緩慢なる増加傾向を認められたが、その大農のうちにあつても最大階級の著しき増加傾向が認められる。この傾向は大體において歐人ゴム園の進出と、住民ゴム園の減退を示すものと言ふことが出来る。

第十七表 馬來大農園の經營者國籍別

合 計	其 他	印 度 人	支 那 人	歐 洲 人	
植付面積 百分比	植付面積 百分比	植付面積 百分比	植付面積 百分比	植付面積 百分比	
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三一年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三二年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三三年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三四年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三五年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三六年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三七年
100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	一九三八年

南方ゴム資源と其の對策

第二卷 三一九 第一號 三一九

1) Malayan Year book により計算す。

栽培面積において六割を占め、生産量において七割を占める百エイカー以上の農園は、然らば何人によつて經營されつゝあるか、前の第十七表によつて明らかなる如く、その栽培面積の七割五分は歐羅巴人即ち主として英米人により、その一割五分は支那人により、その五分は印度人により經營されてゐる。即ち馬來住民の大部分は百エイカー以下の小農經營をなしつゝある。而かも最近の傾向は、緩慢ながらも歐人經營のゴム園面積は増加の傾向にあることが認められる。

言ふまでもなく大農園は、イギリス資本を投下し、土着の労働者を傭入れて、純然たる營利事業として經營されつゝあるものであるから、多數の労働者を必要とする。いまゴム業に従事しつゝある労働者の數を見るに第十八表に示さるゝ如く、約三十萬人に達してゐる。一九三七年の如きゴム産額の増大と共に増加し、翌三八年の大減産と共に減少せむこと言ふまでもない。

第十八表 馬來ゴム園の労働者數¹⁾

	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年
大農園の労働者數	一五四、四七二	三〇〇、五九九	二六三、〇八八	二七八、五一五	三五一、四〇四	二九六、三〇七

こゝに注意すべき事實は、ゴム労働者の大部分は印度人にして支那人これに次ぎ、馬來人の労働者は比較的少い。これは錫鑛山の労働者の大部分が支那人であることに對比して、將來の對策を考ふる場合に重要である。

1) Malayan Year book に據る。

いま農園労働者の国籍別を第十九表として掲げておく。農園労働者の大部分は、ゴム農園に属するものと見ることが出来るであらう。即ち一九三五年の調査によれば、農園労働者の七割近くは印度人であり、二割以上は支那人であつて、馬來住民の如きは、僅かに四%にも足らざる状態である。

第十九表 馬來農園労働者国籍別¹⁾

一九三五年	馬來聯邦	馬來非聯邦	海峽植民地	合計	百分比
印度人	一一一,五九一	四九,九九八	一四,六一六	一八三,二〇五	六七・九
支那人	二九,九五〇	二七,一九〇	三,一六六	六〇,三〇六	二二・四
瓜哇人	一,九四一	六,二四二	一,〇九三	九,二七六	三・五
馬來人	—	一〇,〇三〇	—	一〇,〇三〇	三・七
其他	二,六五八	一,三四九	二,七四六	六,七五三	二・五
計	一五三,一六七	九四,七九九	二二,六二一	二六九,五六〇	一〇〇・〇

ゴム労働者の労働条件については、詳細なる事情は不明であるが、馬來人および瓜哇人の賃金は印度人とほぼ同額であり、支那人労働者は普通は出來高拂であり、結果においては、印度人その他よりも収入は多い様である。いまゴム労働に従事する印度人の賃銀を示せば、次の第二十表の如くである。

之によればゴム工場労働者は最も高く四十五仙乃至五十仙であり、切付および農園労働者は何れも稍々低く四十仙乃至四十五仙である。女子労働者は之よりも五仙乃至十仙の差にて低い様である。何れにせよ極めて低き賃

1) 南洋年鑑(昭和十二年版), P. 966.

銀を支拂はれてゐることは事實である。

第二十表 ゴム園労働者の賃銀¹⁾

一九三八年		馬來聯邦諸州				馬來非聯邦諸州			海峽植民地			
ゴム工場労働者 (女)	ゴム切付労働者 (女)	ペラー	セラン ゴール	ネグリセ ンピラン	パハン	ケダー	ジョ ホール	ケラン タン	シン ボール	ペナン	ウ スレ	マ ラツカ
三三—三六	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五
三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五
三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五
三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五	三三—三五

然らば馬來のゴム資源は、世界各國に向つて如何に分配されつゝあるか、馬來半島の内部において消費せらるゝゴムは、僅かに五百噸に過ぎず、生産の殆んど全部は輸出されてゐる。そのみならず他の南方諸國から輸入されたる多量のゴム類も、こゝから世界各國に再輸出されてゐる。第二十一表によつて明らかなる如く、一九三八年では輸入十五萬噸に國內生産三十七萬噸を加へて、五十二萬噸を總輸出し、この價額二億七千萬円は輸出總價額の四割八分を占めてゐる。

主要なる輸出先は、第二十二表に示さるゝ如く、米國への三十萬噸は約六割を占め、英國への十萬噸は約一割、これに加奈太・濠洲・南阿を加へた聯合國側への合計は、約三十五萬噸に上り、輸出の七割を占める。之に

1) Malayan Year book, 1939, P. 127.
2) Malayan Year book, 1939, P. 80.

第二十一表 馬來ゴムの輸出¹⁾

南方ゴム資源と其の對策

第二卷 三三三 第一號 三三三

	ゴム類總輸出		ゴム類總輸入		馬來半島 輸出總額	輸出總額に 對するゴム 類總輸出 %
	數量	價額	數量	價額		
	英噸	千磅	英噸	千磅	千磅	
1923	252,141	282,738	70,432	55,534	713,198	39.6
1924	261,069	266,191	108,524	76,297	725,085	36.7
1925	320,756	756,641	158,931	237,617	1,289,885	58.6
1926	394,879	717,952	151,511	170,497	1,273,474	56.4
1927	373,957	523,271	183,250	171,913	1,068,694	49.0
1928	410,253	331,762	150,197	88,428	852,026	38.9
1929	580,109	435,324	162,109	81,613	931,129	46.6
1930	557,322	241,797	136,337	42,167	671,214	36.0
1931	519,590	118,340	125,987	18,995	429,829	27.6
1932	478,835	77,907	92,874	9,786	356,301	21.2
1933	573,412	122,439	127,715	21,053	401,791	30.4
1934	677,208	279,639	211,443	71,760	566,645	49.3
1935	590,319	259,094	174,652	67,966	581,963	44.5
1936	520,142	303,314	167,799	94,833	627,761	48.3
1937	618,638	484,661	231,449	143,478	897,120	54.0
1938	526,911	272,980	156,101	74,330	581,554	47.0

1) Malayan Year book, Malayan Agricultural Statistics, The Foreign Trade of Malaya に據り作成す。

南方ゴム資源と其の對策

第二十二表 馬來ゴムの輸出先¹⁾

第二卷 三二四 第一號 三二四

年次	輸出先	佛蘭西		日本		伊太利		獨逸		以上合計		其他共輸出總量
		數量	%	數量	%	數量	%	數量	%	數量	%	
一九三二年	米 國	三、七三〇、三六〇	五七・三	九、九三〇	一四六・六	一、〇一〇、八〇九	二二・二	一、九三六	四・三	一、〇一〇、八〇九	三・五	四、七〇、八七三
一九三三年	米 國	四、八一九	七・八	四、九三〇	八・七	三、〇三六	三・三	三、〇四三	四・一	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三四年	米 國	四、二二六	七・四	五、〇四四	七・七	三、六二二	五・三	三、〇七六	四・二	四、〇八七	四・三	四、七〇、八七三
一九三五年	米 國	四、二六六	七・八	四、九三〇	七・七	三、六二二	五・三	三、〇七六	四・二	四、〇八七	四・三	四、七〇、八七三
一九三六年	米 國	五、〇七六	九・六	三、九一〇	五・五	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三七年	米 國	八、五九九	二一・九	五、三〇三	一三・〇	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三八年	米 國	六、三五〇	一七・二	三、七三四	九・九	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三二年	英 國	三、七三〇、三六〇	五七・三	九、九三〇	一四六・六	一、〇一〇、八〇九	二二・二	一、九三六	四・三	一、〇一〇、八〇九	三・五	四、七〇、八七三
一九三三年	英 國	四、八一九	七・八	四、九三〇	八・七	三、〇三六	三・三	三、〇四三	四・一	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三四年	英 國	四、二二六	七・四	五、〇四四	七・七	三、六二二	五・三	三、〇七六	四・二	四、〇八七	四・三	四、七〇、八七三
一九三五年	英 國	四、二六六	七・八	四、九三〇	七・七	三、六二二	五・三	三、〇七六	四・二	四、〇八七	四・三	四、七〇、八七三
一九三六年	英 國	五、〇七六	九・六	三、九一〇	五・五	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三七年	英 國	八、五九九	二一・九	五、三〇三	一三・〇	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三八年	英 國	六、三五〇	一七・二	三、七三四	九・九	三、〇三六	三・三	三、〇七六	四・二	三、〇三六	三・三	四、七〇、八七三
一九三二年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三三年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三四年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三五年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三六年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三七年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三八年	加 奈 太					三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六
一九三二年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三三年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三四年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三五年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三六年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三七年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三八年	濠 洲					八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三	一・七	八、八四三
一九三二年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三三年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三四年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三五年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三六年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三七年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三八年	南 阿					二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇	〇・五	二、七三〇
一九三二年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三三年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三四年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三五年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三六年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三七年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇
一九三八年	以上合計	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇	三・五	三、三五六	四・五	二、六八八	四・三	二、七三〇

1) Malayan Agricultural Statistics, 1938, Table 13 により作成す。

對して樞軸側の日・獨・伊・佛への輸出は十五萬噸を占めて、約三割に相當する。吾國は三萬噸乃至五萬噸を輸入して、五%を占めるに過ぎない。即ち馬來ゴムの大部分は聯合國側の資源として利用されつゝあつた。こゝに遮斷資源としての根據があるわけである。

最後に、馬來半島におけるゴム在庫品につき一瞥するに第二十三表に示さるゝ如く、むろんゴム景氣の如何により年々に著しく變動するものではあるが、大體においては農園に四萬噸程度すなはち年生産高のほと一割、輸出港にもほと之に近き在庫品があり、兩者を合して七、八萬噸の在庫品あるを常態とする様である。

第二十三表 馬來半島におけるゴム在庫數量

所在	年次									
	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	
大農園・仲買人及輸出港在庫 ¹⁾	八、六八	六、二六	三、四三	六、〇六	八、三三	六、一五				
新加坡・彼南の商人手持在庫 ²⁾			四、七四	六、八九	三、三四	三、二七	五、〇七	二、七五	二、九六	
馬來ゴム園在庫 ³⁾			三、四一	三、一八	三、八六	三、八七	四、五二	五、一四	四、九二	
米國向・歐洲向 ⁴⁾			九四、九八	一一三、〇〇	八二、〇〇	九二、〇〇	一二三、三五〇	一〇一、五六〇	一二一、六七〇	

五 蘭領印度のゴム資源

蘭印ゴムの發展は馬來半島よりも稍々後れ、パラ・ゴムの組織的栽培の開始されたのは、一九〇五年以後のこと

南方ゴム資源と其の對策

1) Malayan Year book による月平均在庫高。
 2) 3) 4) 南洋栽培協會々報による年末在庫高(1939年は十一月)。

とであるが、一九一〇年頃には第二十四表によつて明らかなる如く、なほ世界ゴムの三%を占めるに過ぎなかつた。第一次大戦の勃發した一九一四年頃は、馬來の五萬噸、世界の四割に對し、蘭印は尙ほ一萬噸、世界の八%に過ぎない。大戦後の最盛時には馬來の二十萬噸に對し、こゝでは漸く八萬五千噸に達したが、一九二四、五年頃にはほゞ馬來に追隨して二十萬噸に近く、世界の四割近くを占めて、漸く重要な地位を獲得することゝなつた。一九二九年頃の蘭印住民ゴム事情については、有益なる資料が残されてゐる。¹⁾

然るに一九三〇年の世界恐慌前後には、絶對的には稍々停頓したるに過ぎなかつたが、相對的の世界的地位は著しく低下して馬來の五割以上に對して、蘭印は三割以下に落ちてゐた。一九三四年の國際ゴム限産協定の成立以來は、大體三十萬噸前後、世界の三割五分を占めて、馬來半島には一步をゆづつてゐたが、今次大戦の勃發に

第二十四表 蘭領印度のゴム生産量²⁾

年次	生産量	世界總生産に對する割合
1910	2,400	3.40
1911	2,300	3.06
1912	3,700	3.74
1913	6,400	5.90
1914	10,400	8.67
1915	20,000	12.60
1916	33,100	16.47
1917	44,000	16.60
1918	42,000	14.19
1919	85,000	26.07
1920	77,000	22.45
1921	70,000	23.58
1922	98,700	25.98
1923	131,000	31.80
1924	162,000	38.48
1925	189,500	36.72
1926	203,800	32.38
1927	228,900	37.83
1928	223,221	34.39
1929	256,386	29.71
1930	238,973	29.08
1931	255,048	32.00
1932	210,124	29.60
1933	281,338	33.29
1934	373,306	36.85
1935	275,439	30.75
1936	301,893	35.42
1937	426,827	37.67
1938	306,826	34.45
1939	372,000	37.16
1940	536,000	38.62

1) 臺灣總督官房調査課、蘭領東印度に於ける土人ゴム栽培。
2) 南洋栽培協會々報に據る。

よりに再び馬來に追隨し、最近では殆んど大差なく年産五十萬噸以上、世界の四割近くを占めて今日に及んでゐる。即ち馬來ゴムの稍々老成の感あるに對して、蘭印は新興のゴム資源地として進出しつゝあると言ふことが出来る。

蘭印經濟全體の上より見るも、ゴム資源は最も重要な地位を占めてゐる。一九三五年までは蘭印輸出の首位を占めるものは砂糖であつたが、この年以來はゴム輸出高にその地位をゆづり、最近ではゴムは輸出の二割を占めて第一位にある。併しながら蘭印では石油もほゞ之に追隨して輸出の二割を占め、砂糖・錫もまた相當に重要な地位を占めてゐる。即ち蘭印におけるゴムは必ずしも絶對的地位を占めるものではなく、この點において馬來經濟におけるゴムの地位とは、自ら異なるものがあることを注意せねばならぬ。

第二十五表 蘭印歐人ゴムの地方的分布

一九三四年	農園數			農園面積(陌)			生産數量(噸)			
	全數	同上一比率	生産中	總面積	植付面積	同上一比率	生産中自家生産	買上量	合計	同上一比率
ジャワ	五九五	五〇・五	五五二	六九八、五二	三三三、九〇	三六・八	一五九、三〇	八二、二五	三三二	四三・八
スマトラ	三九五	三三・五	三九二	九三三、八九	三〇六、九〇	三三・〇	二七、七六	一四、三三	四一	一三・〇
ボルネオ	一七三	一四・六	一六五	六二、五八	一六、七二	二・八	一四、七四	四、三五	一、二六	〇・二
セレベス其他	一六	一・四	三	二〇、九四	二、六五	〇・四	一、六五	五、七五	〇	〇・三
合計	一、一四七	一〇〇・〇	一、一三三	一、六五二、九三	六六一、三六	一〇〇・〇	四二、七六	一〇七、一八	一、一八一	一〇〇・〇

1) 南洋年鑑(昭和十二年版), P. 1,333 により作成す。

然らば蘭印のゴム生産は、その如何なる地方に分布されつゝあるか、まづ歐人經營の大農園について見るに、第二十五表に示さるゝ如く、農園數においては、五割はジャワに、三割三分はスマトラに、一割五分はボルネオにある。併し植付面積においては却つてスマトラは最大の六割近くを占め、ジャワは四割に足りない。最後にその地方において買上げたる數量をも含めた生産數量においても、スマトラは最も多く十萬噸を超えて五割四分、ジャワは八萬噸以上の四割二分、ボルネオその他は三%程度に過ぎない。スマトラの中心地方は東海岸州であつて、こゝに八割まで集中されてゐる。

歐人ゴム園とほぼ匹敵する地位を有する住民ゴム園の地方的分布は、第二十六表に明らかなる如く、ジャワには全くなく、スマトラとボルネオに集中されてゐる。ゴム園所有人數七十九萬人のうち六割以上の約五十萬人は

第二十六表 蘭印住民ゴムの地方的分布²⁾

一九三七年	有住民數	同上比率	ゴム樹數	同上比率	植付面積	同上比率	採液可能面積	同上比率
スマトラ	四四、八〇〇人	六三・八%	四一六、四八一千本	七二・五%	四九、二八四陌	七二・九%	四三、七三三陌	七二・九%
ボルネオ	二五、七〇〇	三七・二%	一五、八六二	三六・五%	一九、八五三	二六・二%	一七、三五九	二六・二%
セレベス	四八	〇・〇%	三三	〇・〇%	五二	〇・〇%	—	—
	七六、六、三三六	100・0%	五八二、三六五	100・0%	六六、一、八七	100・0%	六九、九六一	100・0%

2) 同上資料により作成す。

スマトラに、四割足らずの約三十萬人はボルネオにある。またゴム樹數約六億本のうち七割以上はスマトラに、三割足らずはボルネオにあり、栽培面積においても七割以上はスマトラに、三割近くはボルネオに屬してゐる。而してスマトラ住民ゴムの中心地は、南部のパレンバン州にて約三割五分、ヂャンビー州にて約一割五分を占め、殘餘の五割は東海岸および西海岸に分散されてゐる。要するに歐人ゴムはスマトラに六割、ジャワに四割を産し、住民ゴムはスマトラに七割、ボルネオに三割の比率をもつて分布されてゐると概観することが出来る。

蘭印ゴムの生産形態もまた馬來半島におけると同じく、歐人資本による大規模農園と住民による小規模農園との二つの型に分れる。全産額における兩者の比率は、一九二九年度には歐人ゴム四十七萬八千瓏（五六・五%）、住民ゴム三十四萬三千瓏（四〇・五%）と言はれたが、これも正確ではない。住民ゴムの生産量については正確なる資料を缺くが、かりに蘭印全生産量より歐人ゴムの生産量を控除したるものを住民ゴムとして計算し、他の資料をも集成して第二十七表を作成した。

第二十七表 蘭印における歐人ゴムと住民ゴムの生産量

歐人ゴム (一九三五年) 住民ゴム (一九三七年)	及ぶ 所有人数	植付面積	同 上比 率	一九三三年		一九三四年		一九三五年	
				瓏數	比率	瓏數	比率	瓏數	比率
一、二七	六八、四八	五九、九三	四・六	一七、〇〇九	一、二七	四・九	一五、八六三	一、二七	四・六
六八、四八	六八、四八	六八、四八	四・四	一四、八三〇	一、二七	四・二	一五、〇〇八	一、二七	四・六
合 計	六八、四八	一、二七	一〇〇・〇	三二、八三九	一〇〇・〇	三二、八三九	一〇〇・一	三二、八三九	一〇〇・〇

南方ゴム資源と其の對策

第二卷 三二九 第一號 三二九

1) 南洋年鑑(前掲), P.1,326.
2) 同前資料。

之によりて明らかなる如く、歐人ゴムと住民ゴムとの比率は、植付面積において四割六分に對する五割三分、生産數量において五割五分に對する四割五分を示して、歐人ゴムはやゝ優勢ではあるが、大體においては相匹敵する地位にある。この點にも馬來半島との間に、多少の相違の存することが發見される。

歐人ゴム園と住民ゴム園の規模が如何に相違するかは、一園當りの平均植付面積が前者の五百ヘクタールに對し、後者の〇・八ヘクタールなる點より容易に想像しうるであらう。

蘭印ゴムの生産における他の特徴は、國營ゴム園の存する點にある。ゴムに限らず、蘭印は一般に國營事業または國家産業の有力なるところであるが、第二十八表に示さるゝ如く、一九三四年の國營ゴム園は十五に達し、植付面積一萬七千ヘクタール、産額六千噸以上に達する状態にある。

第二十八表 蘭印における國營ゴム園¹⁾

ゴ ム 園 數 ²⁾	植 付 面 積	採 液 面 積	生 産 數 量	一九三二年			一九三三年			一九三四年		
				ジャワ	外 領	計	ジャワ	外 領	計	ジャワ	外 領	計
二 一 二	二二,〇九三	九,八一五	四,一四七	三	三,五八八	四,四七	三	三,五七	四,六四	三	三,五八	四,六四
二 一 二	二二,〇九三	九,八一五	四,一四七	三	三,五八八	四,四七	三	三,五七	四,六四	三	三,五八	四,六四
二 一 二	二二,〇九三	九,八一五	四,一四七	三	三,五八八	四,四七	三	三,五七	四,六四	三	三,五八	四,六四

1) 東亞經濟調査局, 南洋叢書第一卷, 蘭領東印度篇, P. 152.
 2) ガタヘルチャ園各年1を含みます。

第二十九表 スマトラにおける農園労働者数¹⁾

支那人	瓜哇人		合計	一九三五年末	東海岸	パレンバン	アチエーランボン	西海岸	バンカ	リオー	其他自由労働者	共計	同上年比率
	男	女											
三,〇九三	一〇四,六七六	五,三三五	一一三,〇六一	一六,九九九									
九	九,〇〇八	二,四八六	一一,四九四	三,三三三									
九三	八,八四三	二,五五八	一一,四〇一	二,七三三									
—	六,四六〇	二,〇九二	八,五五二	八,五七七									
六	四,九二六	三,〇四三	七,九六九	八,二三三									
六,二二六	五,三三三	三三	一一,五八二	六,五七七									
九五九	二,四九二	七六六	三,二一七	四,四五五									
三,〇七二	一四,七六八	二,〇八〇	一八,九二〇	三,三三三									
三,一八六	八,〇六九	五,三七八	一六,六三三	六,五七七									
三,三三三	一五,一八七	六,四四八	二五,〇〇八	三,三三三									
九三	六,〇三三	三,〇三三	九,〇六六	三,三三三									

而して是等の農園に働く労働者については、詳細なる資料を缺くが、歐人ゴム園面積の五八%を占めるスマトラにおける農園労働者数を主要地方別に示せば第二十九表の如くである。之によれば全體としては約二十五萬人

第三十表 蘭印のゴム輸出額²⁾

輸出総額	一九三一年	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
七三三,五九九 <small>千盾</small>	七三三,五九九	五五二,七四三	四七五,七六六	四九三,四七四	四三三,五三三	九五一,一九四	六五七,七五九	七四五,八二八
五,二六八 <small>千盾</small>	五,二六八	三三,九四四	三六,五五八	八〇,八六二	五七,七四四	二九六,六九二	一三三,三八四	一五,三〇〇
同前比率	100%	六〇	六四	七七	六〇	一二	九〇	一〇二

南方ゴム資源と其の対策

第二卷 三三一 第一號 三三一

1) 南洋年鑑(前掲), P. 1443 により作成す。
 2) 大江, 中原譯, 蘭印統計書(1940年版)。景山哲夫著, 南洋の資源と共榮圈貿易の將來。南洋年鑑。

のうち九割三分までは自由労働者であり、そのまた九割までは爪哇人すなはち自國民であり、そのうち男子は六割、女子は三割を占める。之に對して移民労働者としての支那人は約二萬人に過ぎず、全體の一割以下に過ぎない。この點に於て印度人労働者が七割近くまでを占める馬來ゴム園とは著しくその事情を異にするものである。

最後に、蘭印のゴム資源は、世界各國に向つて、如何に分配されつゝあつたか、まづ第一に、ゴム輸出價額が蘭領印度の總輸出價額において占むる地位を見るに、第三十表にて明らかなる如く、最近の概數では七億五千萬

第三十一表 蘭印のゴム輸出先

輸出先	年次	
	數量	比率
米國	二二,二一〇	三〇.八
新嘉坡	一〇,一〇〇	一三.五
英國	三,〇五〇	四.〇
和蘭	二,一七〇	二.九
獨逸	二,二六〇	三.〇
伊太利	三,三七〇	四.五
日本	一三,四〇〇	一七.七
ペナン	五,六〇〇	七.五
濠洲	一,〇〇〇	一.三
ニューギランド	一,〇〇〇	一.三
其他共合計	三六,三〇〇	四七.八
一九三一年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三二年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三三年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三四年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三五年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三六年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三七年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三八年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇
一九三九年	一〇〇,〇〇〇	一〇〇.〇

1) 前掲資料。

盾に對する二億盾、即ち二割六分を占め、而かも一般には増加の傾向にあることが看取される。

次に之が世界各國に如何に分配されつゝあるかを第三十一表について見るに、最近の概數四十六萬噸の輸出のうち、その四割程度は米國へ、三割近くは新嘉坡へ向けられ、之に次ぐ英國へは僅かに六%、和蘭本國へは五%にすぎない。吾國へは事變前まで約二萬噸、六%を輸出し、獨・伊に對しては、兩國にて三萬噸未滿に過ぎなかつたから、蘭印ゴムの約九割は聯國側に輸出されてゐた。こゝに遮斷資源の根據があるわけである。

六 ゴム對策の諸問題

第一に、何よりも急速に一定の計畫を樹立して、計畫的な生産統制を行はねばならぬ。併しながらその統制は從來の如き英・米支配の下に行はれた生産統制とは、全くその意味を異にするものでなければならぬ。蓋し從來のゴム統制は一に英・米・蘭のゴム園資本の利益擁護のために行はれたものであり、純然たる國際カルテルの營利統制に過ぎなかつたからである。大東亞戰爭を契機に行はるべきゴム統制は、全く新たな見地から、第一は敵性國家に對するゴム資源の遮斷政策として、第二は、住民生活の確保政策として、行はれねばならぬ。こゝにゴムの對策の根本方針がある。

第二に、ゴム資源の計畫または統制は、南方諸國の全體にわたる綜合的計畫または統制でなければならぬ。部分的な生産統制の成功し難いことは、かの第一次大戰後一九二一年から二八年まで行はれたスチブソン法の失敗の歴史に徴しても明らかである。これが失敗の原因は、蘭印その他の地方を之に参加せしめ得なかつた點にあ

つた。當時の蘭印は、後れて發達したそのゴム事業を擁護するためと、生産費の低廉なるためと、住民産業の保護とを理由として、數次の加入勧誘にも應ぜず、アウトサイダーとして獨立したために、馬來その他における限産も、蘭印その他における増産によつて報いられ、國際カルテルの目的は達成されなかつた。之とは全く異なる目的の下に行はれる今後の統制においても、部分的または地方的な生産統制では成功は困難であつて、全般的な綜合的計畫の下に、統一的な統制が行はねばならぬことは言ふまでもない。

第三に、併しながら綜合的計畫または統一的統制は、必ずしも劃一的統制を意味するものではない。先きにも屢々指摘したる如く、馬來ゴムと蘭印ゴムとの間には、種々の點において著しき特殊性があるから、この點をよく考慮して、劃一的な千遍一律の統制を行ふことは出來うる限り之を避けて、その國の實情に適應せるそれ／＼の對策を必要とする。併しまた全く獨立の個別的對策に陥ることなく、全體として綜合的な統一性を失つてはならない。

第四に、綜合的な統一性はたゞに地域的に必要なるのみならず、經濟的または産業的にも必要である。即ちゴム對策は決してそれだけを切り離して考ふべきものではなく、全體としての南方經濟または南方資源の一環として、全體との關聯性において考へられねばならぬ。

かくの如き豫備的前提の下に、まづ第一の應急對策としては、ゴムの生産・運搬・輸出は、全面的に一應は禁止されねばならぬ。之は後に行はるべき許可制の前提として、また敵性國家への遮斷政策として、最初に採らるべき方策であらう。すでに今日までも、新なる植付は禁止せられ、また輸出許可量は割當てられてゐたのであ

る。

第二に、英・米の敵性資本に屬するエステートのゴム園は、直ちに我方の管理の下に置かれるであらう。併し之は石油資源の如きものとは全く異り、我方の物資獲得を重要とせざるものであるから、大東亞戦争の完勝後までは、恐らくそのままに封鎖保管さるべきものであらう。馬來においては、百エイカー以上の大農園は七割五分まで英米資本に屬するが、二割は支那人および印度人に屬するものである。之に對しては別に考慮を要するであらう。たゞ戦利品としてのもは、馬來半島のみにも數萬噸に上るであらうから、これが保管または利用は、別に考慮を要する問題となる。従來はスモーキングによつて五ヶ年の保存に堪えうると言はれてゐた。

第三に、エステート封鎖に伴ふ失業問題も當然に起つて來るが、少くとも馬來半島に關する限りは、従來のゴム園労働者二十數萬のうち約六八%は印度人、二二%は支那人、三%は爪哇人であつて、馬來住民は僅かに三%に過ぎないから、普通に考へられる程に困難な問題ではない。

第四に、馬來または蘭印の住民ゴム園に對しては、英米資本の大農園に對するとは、異なる對策を必要とするであらう。馬來においては栽培面積の四割まで、生産高の三割まで之に屬して年産十萬噸を超え、蘭印においてはほゞエステートに匹敵して年産十數萬噸に上りつゝあつた。大東亞戦争の完勝後において、吾國のゴム工業を勃興せしむるにおいては、是等の住民ゴムを先づ第一の原料とし、進んでエステート・ゴムをも原料として輸入する必要を生ずるであらうが、今日の戦時經濟においては、運輸船腹においても、混合材料においても、勞力・

動力の上においても、より重要な用途に振り向けねばならぬから、こゝに多くを期待することは困難であらう。また南方諸國にゴム工業を興して、東亞の需要に應ずることも考へられるが、これとて當分は既存の設備の程度に限られて、大なる消費量を之に期待することは出来ない。かくして恐らく住民ゴムも或程度の限産を必要とするに至るであらう。

大東亞戦争の現實過程においては、この大戦に勝ちぬくことが最高唯一の目標であるから、そのためには吾國の國民生活を最少限度に切り詰める必要あると同時に、東亞共榮圈内の住民もまた、その生活を最低限度に引下げねばならぬ。それが將來の東亞共榮を齎らす唯一の途であり、それなくして東亞の解放を齎らすことは困難であらう。従つて戦争の過程においては、多少の失業や轉業は、わが國民と同じく彼等もまた之を甘受せねばならぬ。この對價を拂はずして、徒らに拱手傍觀しながら自らを歐米の壓迫より解放せんとすることは、餘りにも獨善的であり利己的であつて、許さるべきではない。

併しながら已むを得ざる住民の最低限度の生活は、住民ゴム園を生かすことによつて考慮されねばならぬであらう。この程度のゴム生産量と、吾國の今日に必要とするゴム消費量とが、全く一致する場合は問題はないが、尙ほそれが過剰なる場合は、恐らく何等かの方法によつて、最少限度の買上げ保管を考慮する必要に迫られるかも知れない。ゴム價格を一封度十仙としても、一噸は二百二十四弗となり、十萬噸は二千二百四十萬弗を要することとなる。

近き將來において獨伊の樞軸側と連絡の方法さへつけば、ゴム需要は著しく増大して、恐らく住民ゴムの全部を活用しうるであらう。一九三七年の平時における日・獨・伊・佛の消費量は、世界の二割二分を占めて二十四

萬噸に達してゐたからである。何れにせよ住民ゴムに對しては、常に伸縮自在に動かしうる生産統制の方法を考慮して、必要に應じて急速に増産し、または限産しうる弾力性を保持せしめることが必要であらう。

次に生産統制に關聯して價格對策を考慮せねばならぬ。英米資本のゴム・カルテルによつて行はれた從來の生産統制は、その營利主義から来る必然の結果として、ゴム價格を高く維持せんとしたものである。それによつて大規模營利事業としてのエステート・ゴム園の利潤を確保したのであるが、この點において住民ゴム園は、之とは異なる立場にあることを注意せねばならぬ。

住民ゴム園は殆んど何等の資本を用ひず、自己勞働によつて開發され、また自己勞働によつて經營されつゝあるから、その生産費はエステート・ゴムに比し甚だしく低廉である。現に蘭印において高率の輸出税を課して住民ゴムを制限せんとしたる場合にも、ゴム價格の低下すればするほど、増産によつて之を償はんとする住民の傾向によきために、この政策は遂に失敗した歴史をもつてゐる。

價格の維持を目標とした從來のゴム對策は、大東亞戰爭を轉期として、直接に數量の統制を目標とする對策に轉換せねばならぬ。ゴム價格は寧ろ反對に低下方策を採るべきではないか、エステート・ゴムの完封と住民ゴムの存續によつて生産費は著しく低下する筈であるから、從來とは全く異なる生産條件の上に、ゴム價格を算定せねばならぬ。これまで英・米の自由價格においても、一九三二年には新嘉坡の最低相場は五仙以下に落ちたことがある。何れにせよ住民の最低限度の生活維持を目標として、ゴム價格は出来る限り低位におくと同時に、從來の如き自由價格の暴騰・暴落を繰り返さしめず、常に安定せる價格政策を必要とする。低位に安定せしむることが、住民生活の安定の上に最も必要な條件である。

南方經濟の一般方策におけると同じく、ゴム對策においても、またモノ・クルトウルからポリ・クルトウルに即ち單一生産から多角生産に轉換せねばならぬ、住民農家の經營を多角的ならしむると共に、ゴム園經營もまた多角的に、即ち從來の清掃主義から間作主義または森林主義に轉換せしむることによつて、ゴム生産費を低下せしめようと共に、住民生活を安定せしめねばならぬと思はれる。

要するに、大東亞戰爭の完勝までは、絶対限度の遮斷政策と、最低限度の生活對策を根本目標として、敵性エステートの完封と住民ゴム園の統制を斷行すべきであらう。併しながら戰勝後の十年または二十年後においては、南方ゴム資源の全能力を吾國において活用するのみならず、進んできますく之を開發増産することによつて謂はゆる東亞共榮圈を實現せしむべく、根本的にはこの將來の大目標に向つて、すでに今日より十分の準備と調査研究を進めねばならぬ。この點において専門の科學者および技術家の研究に期待さるゝ所は極めて大きい。試みに二三の重要な問題を指摘すれば、

- 一、ゴム・ラツテックスまたはゴム・シートの保存・利用に關する研究は、主として化學關係の問題であり、
- 二、ゴム園・ゴム樹の保存・管理・栽培の研究は、主として農林關係の問題であり、
- 三、ゴム工業の振興またはゴム利用の増大に關する研究は、主として工業技術の問題であり、
- 四、東亞共榮經濟または南方經濟との關聯ならびに世界經濟との關聯に關する問題、生産統制・價格統制・生産費・住民生活の問題の如きは、經濟關係の問題として研究されねばならぬ。

かくしてゴム資源の一つに就いて見ても、各方面の國家總力を總動員して、始めて完全なる南方國策を遂行しうべく、之によつても南方經營の國民的課題の如何に重大なるかを知ることが出来る。(一七・一・二二)